

## 私の先生は子どもたち

小林奈央

「小さいころから保育園の先生になるのが夢でした！」と保育士の方のほとんどがおっしゃると思います。しかし私は大学在学中、保育実習やアルバイトでたくさんの子どもたちとかわかりましたが、すぐに結果を求めてしまったり、決まった手順で事を進めていくことを求めてしまう私には、子ども成長をそばで見守ったり、毎日違った姿を見せる子どもたちに寄り添う現場の先生は向いていないと感じました。そして大学三年の秋から、民間企業の就職

活動を始めました。民間企業といっても、子ども服やおもちゃなど子どもに少しでも関係のある企業を受けていたため、「そんなに子どもが好きなら保育

士になれば？」と面接で何度も言われました。そんな中、内定を頂いた会社は保育園をつくり運営していく会社でした。

内定をもらったうれしさもつかの間、「本当に現場を知らない私が、保育園をつくれ増やせの仕事をしてよいのだろうか？」という疑問がわいてきました。現場を知らずに理論だけで、私の考える「子育てにかかわるすべての人が楽しいと思えるような子育て支援」などできないと考え、そこで、子どもたちや保護者のことを一番に考え、子育て支援を行ってほしいのは公の機関だと思い、公立保育所の採用試験を受け、保育士になる道を選ぶことを決意しました。

## 毎日がドタバタの一年目、二歳児担任！

配属された園は、区内でも児童数の多い保育園でした。実習していた保育園は少人数だったため、クラスの子どもの人数の多さに、毎日あたふたしていました。一年目の保育士には、指導担当の先輩との交換日記を行うようにと、区から一冊のノートを渡されています。このたび「私の保育ノート」を執筆するお話を頂戴し、二年ぶりにその交換日記を開いてみました。そこには、今振り返ると赤面してしまうような日々の苦悩が書かれていました。中でも、「子どもたちを次の活動に誘う時、『よしよう！』と声を何度も掛けたのですが、『いや！』『ダメ！』と言われ、結局トイレや次の活動に気持ち良く向かわせることができなかったです」という悩みが一番多く書かれていました。今、この自分自身の書き込みを見ると、「そんなのあたりまえ！ 二歳は発達段階では自我の芽生えの時期であり、イヤイヤと言っ

ているのが順調に発達している証拠。ましてや信頼関係もできていない、来て間もない保育士の言うことを聞くはずがない」と容易にわかるのですが、その時の私は、早くクラス担任の一人として一人前の仕事をしなくてはと必死だったのです。

しかし、一週間二週間と子どもたちと過ごしているうちに、子どもたちは初めて見る保育士である私をよく見ているのだなと気付きました。特に、子どもたちの前に立つと、〴〵この先生はどこまで許してくれて、どこからは叱るのだろうか？〴〵この先生はどんな楽しい遊びをしてくれるのだろうか？〴〵という子どもたちの気持ちが手に取るようにわかるようになりました。今思えば、お互い不安で探り合いだったのだと思います。子どもたちの気持ちに気付いてから、子どもたちの期待に応えよう、楽しい遊びをたくさんしようと思ったのですが、大学時代、教職課程も取らず、実技の勉強もまったくしてこなかった私は明らかに勉強不足でした。勉強するのは今か

らでも遅くないと考え、二歳児の手遊びや絵本、戸外遊び、室内遊びなど、研修に参加し、保育雑誌を読み、勉強しました。先輩方に比べてできることは少ないかもしれないけれど、私にしかできない遊びを考えようと毎日必死でした。そして、その身に付けた遊びで、子どもたちと一緒に楽しい経験をたくさん重ね、子どもたちに「この先生の言うことなら聞いてみようかな」と思ってもらいたいと考えたのです。その気持ちはすぐに子どもたちに届きました。「ミッキーの手遊びやって！ なお先生しか知らないから、先生やって、早く！」と子どもたちから誘ってくれるようになったのです。

子どもたちは、私が仕事を始めてから苦戦していた保護者対応にも助け舟を出してくれました。まだ自分の子どもを育てたこともなく、保護者からの質問にもきちんと答えられる自信がなかったために、保護者の方とのやりとりは緊張の連続でした。しかし、子どもたちと信頼関係ができたところ、「家でおお先生がやってくれた遊びの話をしているんです

よ」と保護者の方から言っていただけのようになりました。そのことが少しずつ自信につながり、緊張することが減ってきました。当時の園長先生に「保護者対応の秘訣は子どもたちと仲良くなること」と言われていたのですが、まさにそのとおりでした。

半年がたったころ、保育にも慣れてきたのですが、当番時の他クラスの保育では失敗の連続でした。当番時は二歳児ではない年齢の子どもたちを保育するため、私が設定した遊びに子どもたちが満足しなかったり、信頼関係ができていないために話をしてもうまく伝わらず、次の活動に向かわせる時には叱ってしまい、笑顔で保育していることは少なかつたように思います。「向いていないのでは……」と思うことも何度もありました。しかし、そのたびに、担当クラスの子どもたちの「なお先生、おかえり！」「待ってたよ」という言葉に救われました。

三月、クラス希望を出す時期になり、「この子たちの成長を来年度もそばで見たい」と思い、持ち上がり三歳児クラスを希望しました。

## 二年目、一歳児担任。言葉が通じない!

二年目は、希望に反して一歳児担任でした。「一歳児には一歳児のかわいさがたくさんあるよ」と言われたのですが、正直、最初の二か月はそのかわいさを感じる暇もなく、ただただ二歳児との違いに戸惑う日々でした。人見知りから、持ち上がり担任が部屋からいなくなると号泣され、それでも何とか受けとめようとさまざまな声掛けをしましたが、うまくいかず、帰ってから家で泣く日々が続きました。

そんなある日、前年に担任したクラスの子が、家で「なおせんせいだいすき」と手紙に書いて、一歳児クラスの部屋に届けてくれました。その手紙に、「この子たちとだって一年前は同じだったじゃないか。信頼関係のないところからここまで時間はかかったけれど、大好きだよ」という気持ちや伝え続けられ、必ず子どもたちに届く」という、忘れかけていたことを気付かされました。その日以来、この子た

ちとも楽しい経験をいっぱいしよう、そして今年の担当の一歳の子どもたちにも、この先生と一緒にいると安心できるし楽しいと感じてもらおうと心に決めました。安全面で子どもたちに注意しなければいけないこともあるけれど、それは信頼関係のできている持ち上がりの先生方に任せ、できるだけ「一緒に楽しいことをした」と子どもたちに思ってもらえるようにしました。

ある日、一歳児の子どもたちと、ままごとコーナーで遊んでいた時のことです。二歳児クラスの時はい保育園ごっこやレストランごっこ等、しっかりと設定のもと、言葉のやりとりを盛んにしながらごっこ遊びを行っていたので、言葉もなくお皿や食べ物だけのやりとりをする一歳児の子どもたちにかかわればよいのかと戸惑いました。そして同時に二歳児担任の時は、言葉に頼って保育をしていた自分に気付きました。しかし、子どもたちと一緒に、ままごとコーナーで遊んでいるうちに、子どもたち

が私の手を引いてお皿を渡してくれたり、食べ物  
私に渡した後には「おいしい？」という表情で顔を  
傾けて私のことを見ていることに気付きました。

まだ言葉でのやりとりが少ししかできない一歳児。  
言葉に頼らず、子どもたちの表情から子どもたちの  
心の声を聴き、それに寄り添い、私自身の気持ちも  
表情で伝えるようにしなければならぬと思いまし  
た。そのためには子どもたちとの遊びに一緒に心か  
ら楽しいと感じることが大切だと思いました。一歳  
児の保育資料を読みあさり、感触を楽しむ手作りお  
もちゃもたくさん作りました。子どもは正直で、こ  
ちらがどんなに苦勞して設定した遊びでも、面白く  
ないとすぐにやめます。でもそのたびに、何がいけ  
なかつたのかを考えることができませんでした。理由は、  
発達段階に合っていないかつたり、準備不足だつたり  
とさまざまでしたが、少しずつ私の思いは子どもた  
ちに伝わっていききました。言葉は多くはないけれど、  
朝私が抱いても泣かなくなり、子どもたちのほうが  
らひぎの上に座りに来ることも増えてきました。

「お母さんやお父さんと離れるのは寂しいけれど、先  
生と一緒にいたいかな！」という心の声が少しずつ  
増えてきたように思えます。そして、言葉を覚えた  
ての子どもたちに「なおせんせい」と呼ばれた時、  
「ママー」と呼び間違えられた時のうれしさは今  
でも忘れられません。時間はかかったけれど、二年  
目の四月に先輩から言われた「一歳児のかわいさ」  
に、ようやく気付くことができました。

そして三月。二年目も持ち上がりを希望しました。

### 念願の持ち上がり！ 二度目の二歳児担任

念願の持ち上がりで二歳児のクラス担任になりま  
した。一年目と同じ二歳児クラスですが、信頼関係  
がすでにできているという自信と、もう言葉が通じ  
る年齢になったという思いから、言葉を指示の手段  
として使ってしまったという自分に反省する毎日です。  
一年目に信頼関係の築き方を、二年目に言葉ではな  
いやり通りの大切さを子どもたちから学んだのに、  
それを無駄にしてはいけなさと自分に言い聞かせな

がら保育をしています。

そして二歳児クラスになってから強く感じるようになったのは、子どもたちは私たち大人の鏡だということです。あるごっこ遊びでの一場面で、女の子が男の子に対して「持つてきて。後でじゃない、今！今持つてきて！」と強く言っている場面がありました。その場面を見て、はっとさせられました。「きつい言い方だな」と思った言い方は紛れもなく、保育士である私が子どもたちに次の活動へ向かわせる時に使っている言葉だったのです。子どもは大人の言うとおりににはならないけれど、やるとおりにやる」という言葉を研修で聞いたことがあるのですが、まさにそのとおриだと思えます。大人のやることをよく見ている子どもたち。「大人はいいんだよ」「先生はやってるけれど、みんなはしちゃいけない」は通用しないと日々感じます。片付けの動作、ご飯の食べ方、こうなつてほしいという姿があるのなら、まず、大人である私たち保育士がやってみせなければ

いけないということを忘れずに保育をしています。まだ保育士三年目。間違えることも、失敗したなと感ずることも多々あります。しかし、そのたびに、子どもたちの「なお先生！」の声に、「大丈夫だよ。私たちは先生のこと見ているよ」と言ってもらえているように励まされます。

保育士をもともと目指していたわけではなかったために、私の保育には足りない部分がたくさんあります。しかし、子どもたちの先生になるのは今からでも遅くはないということ子どもたちから学びました。子どもたちから教えてもらったこと、感ずさせてもらったことを一つひとつ書き留め、私の保育の教科書を作り続けていきたいと思えます。そして、その教科書をもとに、子どもたちが成長した時に、子どもたちが楽しい思い出として思い出し、「先生みたいな大人になりたい」と思ってもらえるように、一人の大人として、保育士として、保育をしていきたいと思えます。

(東京都公立保育所)